



## 会議レポート

### 第77回全国大会

～社会に浸透し，社会を変革するICT～

## 速報

「社会に浸透し，社会を変革するICT」をスローガンとする情報処理学会第77回全国大会が3月17日～19日京都大学で開催された。3日間の総参加者数は，前回76回大会の参加者数3,030名と比べて約2割増しの3,610名となり，50周年記念（第72回）大会に次ぐ歴代2位の大盛況の大会となった。これに加え，今大会における最大の成果として，年初のニコニコと本会との提携に基づき，全国大会2会場の全イベントをニコニコ生放送で動画中継し，延べ15万人が視聴したことが挙げられる。物理的な参加者数の40倍を超える驚異的なオンライン視聴を獲得できたことは今後の全国大会ならびに本会の発展に向けて大きな転換点となる可能性がある。

今回総参加者数が例年より大幅に増加した要因として，企画・開催したイベントの質および数の大幅な充実が挙げられる。従来，イベントの提案は，全国大会のプログラム委員，本会の委員会・研究会などに限られていたのを，今回は会員であれば誰でも提案できることにした。これにより，さまざまな魅力的な提案がなされ，プレナリーセッションを除くすべての時間帯で常に6つのイベントが並列開催されるという，イベントの数の面での充実をはかった。さらに，全国大会において本会の最も面白く見逃せないイベントを開催したいという目標を掲げ，いくつかの特別イベントが周到に用意された。その最たるものは，大会初日に開催されたIPJSJ-ONEである。本イベントは，参加者が，本会で今どんな研究がホットなのかを全分野を横断して俯瞰できるようにすることを目的に，産業技術総合研究所・後藤真孝氏率いる新世代企画委員会が企画し，東京大学・落合洋一氏率いるIPJSJ-ONE企画・実施委員会がインプリメントした。詳細は，本誌記事「研究者人生を変えるIPJSJ-ONE — IPJSJ-ONE参加報告—」<sup>1)</sup>に譲るが，各研究分野の看板を背負った19名のトップ研究者によるTED風のショートトークは，さまざまな工夫が凝らされておりコンテンツとして非常に見応えのあるものであった。500人収容のメイ



図-1 第1，2イベント会場の百周年時計台記念館と立て看板

ン会場が立ち見で溢れ，ニコニコ生放送での視聴者数が4万人を超えたのは，これの裏付けであろう。

その他，さまざまな魅力あるイベントが開催された。初日には，例年に倣い，喜連川優会長の挨拶，それに続く各種表彰式，情報処理技術遺産認定式が厳かに執り行われた。これらの式の後，1件の特別講演と2件の招待講演が開催された。東京工業大学・松岡聡氏によるスーパーコンピュータ研究の変遷・将来予測に関する特別講演は他分野の研究者にとっても大変示唆に富むものであった。IEEE Computer Society会長のThomas M. Conte氏，China Computer Federation CEOのZide Du氏による招待講演では，最新の研究トピックに加え，それぞれの学会を取り巻く状況などが紹介された。2日目，3日目には，カーネギーメロン大学・金出武雄氏による，計算機視覚の歴史と新たな可能性，山極寿一京大総長による，言語登場以前の人類のコミュニケーション，国際電気通信基礎技術研究所・川人光男氏による脳活動の非侵襲計測データのデコーディングに関する招待講演が開催された。また，特別講演として，文部科学省・荒畦悟氏による官民協働で日本の若者の海外留学を支援する「トビタテ！留学JAPAN」の紹介があった。招待講演以外にも，ビッグデータ，オリンピック，コンシューマサービス等の最新トピックに関するトップ研究者による興味深いイベントが多数開催された。2日目に開催された国際AIプログラミングコンテストSamurai Coding 2014-15 World Finalでは，予選を勝ち抜いた強豪AIプログラム群による熱い戦いが実況された。紙面の都合で個々の詳細に触れることはできないが，これらのイベントは非常に興味深い内容であり，参加できなかった方にはニコニコ動画のアーカイブの視聴を勧めたい。

これ以外にも，京都大学ICTイノベーション／情報学シンポジウムとの共催，同時期に京都大学で開催された言語処理学会年次大会との相互の後援も参加者増の後押しとなったと考えられる。

イベントの充実以外にも，今大会でさまざまな新たな試みを行った。まず，学会の盛り上がりを見える化するWebアプリ，IPJSJ77Nowを京都のIT系学生コミュニティと開発・運用した。今回はやや宣伝不足であったもの



図-2 喜連川会長挨拶とニコニコ生放送の中継スタッフ

の、今後利用者を拡大し本格的に活用していくことが期待される。さらに、託児所の開設や情報保障（第1イベント会場での字幕付与とその他要望に応じた対応）を歴代全国大会で初めて実施した。これを期に、今後誰もがますます参加しやすい全国大会になっていくことを期待する。

ここまで、今回大会で新しく取り入れたことについて触れたが、通常セッションに1,400件の論文投稿があったことを忘れてはならない。全国大会の開催意義についてはさまざまな意見があるが、学生を含め研究者・技術者が自身の研究を発表し feedback を得るとというのが一義的な価値である。これらのベースとなる価値に加え、全国大会に参加すればICTの今を俯瞰することができる、さまざまな専門分野のトッププレイヤーの生の声を聞き、質問することができる、本会の広範な活動を知ることができる、という二義的な価値がある。この二義的な価値は、研究者・技術者・学生にとって非常に大きく、そのことを今回の大会で幾ばくか示すことができたのではないかと思う。

このように多くの新たなことに取り組んだ大会であったが失敗もあった。京大総長の招待講演の際、スライドがプロジェクタに投影されず講演が9分程度中断した。裏話をすると、総長にはずっと動画中継の許可をお願いしていたが、最後の最後、登壇されてマイクをつけ、パソコンをつなぐ間もお願いを続けようやく許可をいただいた。ほっとして、講演と中継が始まり、総長がプロジェクタに何も映さないまま話を始められたが、導入のお話だったのでそういう演出かと思って聞いていたとこ



図-3 IEEE CS 会長 Thomas M. Conte 氏による招待講演

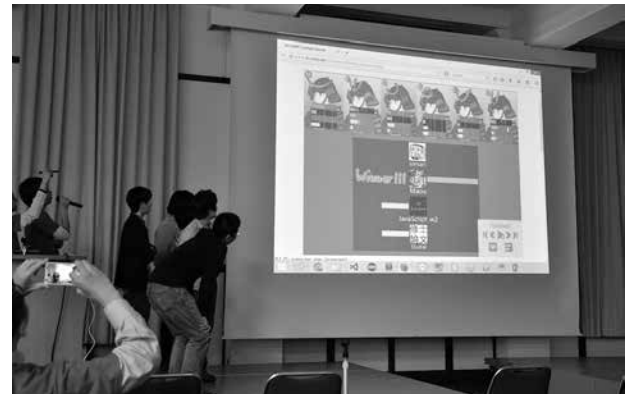


図-4 Samurai Coding 2014-15 World Final の様子

ろ、「あれ、これ映ってませんね」ということになり、そこから9分ほどの中断となってしまった。油断大敵であったと反省している。

最後に、今大会を成功裏に終えることができたのは、岡部寿男氏（実行委員長）、河原達也氏（実行副委員長）をはじめとする京都大学の関係者、また、大会委員会、プログラム委員会、学会事務局をはじめ、多数の関係者の献身的な貢献による。今回の大会の勢いを、ぜひ次回以降の大会に繋げていければと思う。次回の第78回全国大会は2016年3月10日～12日、慶應義塾大学矢上キャンパスで開催される。

#### 参考文献

- 1) 金岡 晃：研究者人生を変える IPSJ-ONE, 情報処理, Vol.56, No.6, pp.596-599 (June 2015).

(黒橋禎夫/京都大学・全国大会プログラム委員長、安本慶一/奈良先端科学技術大学院大学・全国大会組織副委員長)